

石川

ナオ

【梗概】

優秀なシステム開発者である芦屋るいは、同性愛者であることを理由に大手病院の医療AIプロジェクトを途中で外され、大手量販店「飯尾ライフ」への配属変更を命じられる。

刑事で恋人である海老沢律から退職を勧められたものの、会社に一泡吹かせたいるいは、プロジェクトメンバーの日高礼一から離脱を惜しまれつつも、辞令を受け入れた。しかし新職場ではスキルが活かされることはなく、左遷を嘲笑う視線にるいは辟易していた。

そして社内では、WEB会議中にPCやスマホに社員が殺されるといふ不可解な噂が広まっていた。

若手社員、江良成嗣の教育係を任せられながら、るいは本当にPCやスマホが人を殺したのか、開発者としての探究心から密かに調べる。そして過去に導入見送りとなったAIシステム「cureSE」が未だ稼働しているのに気づく。

一方、ある殺人事件を追う律は、被疑者がマインドコントロールされていたと知り、その当事者を逮捕する。それはるいと共に働いていた日高であった。そして彼がcure SEの開発者であることも判明する。

cure SEは会社中のコミュニケーションを学習し、パワハラや差別的な行動のある社員に評価を下すAIとなっていた。そして音を使い、制裁として殺害していたと突き止めたものの、新たに江良の上司である青井映介が標的となってしまう。

るいはcure SEを止めるべくハツキングを試みる。しかしるいの力だけでは止められない程、高度な存在に成長していた。

るいは許可なく、かつて開発した医療AI「Reelieve」を使って食い止める。そして律たち警察の介入により、飯尾ライフのシステムは全停止された。

しかしるいは日高が本当にcure SEを殺人AI「cure SE」へ変えたのか疑問に

思っていた。その陰に別の存在を感じつつも、江良らしき存在があったことには気づけないまま。

その後、懲戒解雇となったるいはフリーランスとなり、不穏な人間社会とテクノロジーの間を生き続けるのだった。

【人物】

芦屋 あしや るい (34、36) システムアーキテクト

海老沢律 えびさわりつ (26) 警視庁捜査一課刑事

永牧漠 ながまさばく (45) るいの会社の同僚

江良成嗣 えらせいじ (24) 飯尾ライフ社員

青井映介 あおいえいすけ (39) 飯尾ライフ社員 江良の上司

日高礼一 ひだかれいいち (40、42) 東都医大病院 職員

星田 アド ほした (34) 飯尾ライフ社員、MTF トランス

ジエンダー

倉津修 くらつしゅう (50) 飯尾ライフ社員 故人

八代 りく やしろ (27) 飯尾ライフ社員

釣川 つりかわ (50) 飯尾ライフ社員 アドの上司

柳原 やなはら (49) 飯尾ライフ社員

須藤 すどう (46) 捜査一課刑事、律の同僚

澤村 さわむら (48、50) るいの元上司

男性医師 A、B

鑑識官

女性社員 A、B

病院受付 (声のみ)

I T 專 門 家

電 子 音 聲

○どこかの会議室 A

キーボードを打つ数名の手。

○東都医大病院・オフィスフロア

デスク前に立つ芦屋るい（36）。

ロングヘアーを下ろし、オフィスカジ

ユアルな格好。

カバンからノートPCを取り出す。

○どこかの会議室 B

キーボードを打つ手。

チャットに「お疲れ様です」と書き込

みされ、一気に「お疲れ様です」と1

0件程の返信がつく。

○倉津宅・書斎

リモート会議に参加しようとしている

倉津修（50）。

ノートPCの画面、20人くらいのリ

モート会議。続々映る参加者の顔。

会議内チャットには「お疲れ様です」
「よろしくお願いします」が多数。

3

○東都医大病院・オフィスフロア

ノートPCを操作するらしい。
東都医大病院用チャットの画面「今ま
でお世話になりました」と送信。

○倉津宅・書斎

倉津、イヤホンをつけ、ノイズキャン
セリングで周囲の音が消える。
PC画面、音はなく、「お疲れ様です」
と挨拶する参加者たちの顔。

倉津「……っ……」

倉津、静寂の中で突然意識を失い、P
Cの上に突っ伏す。
反動で閉じるPCのモニタ、倉津の頭
を挟み、まるで噛み付いているようにな
っている。

4

○メインタイトル「機械仕掛けの神が嗤う」

5

○東都医大病院・オフィスフロア

デスクの上にプレゼン資料の束。表紙には「医療A I 『R e · l i e v e (リリーフ)』導入プロジェクト」資料を見つめるるい。

日高礼一(礼)、慌て気味に来る。

スーツにメガネの純朴そうな風貌。首から病院の職員証を下げている。

日高「芦屋さん！ 今日まででしたよね、この2年ありがとうございました」

日高、深々と礼。

るい「わざわざご挨拶ありがとうございます」

日高「僕としては残念です、R e · l i e v eにはこれからも芦屋さんが必要なのに」
るい「これは皆さんが使うシステムです。私に依存していても良くないんですよ」

るい、持っている資料を躊躇いなく段ボールに入れる。

6

段ボールには「廃棄」のラベル。

るい「大丈夫です、マニュアルも作り込みましたし。セキュリティもそう簡単に突破されることはありません」

日高「さすがです。ただ僕個人としては、プロジェクトが終わっても、優秀な芦屋さんと仕事したかったです」

るい「恐れ入ります。でも会社が決めたことなので。この業界ではよくあることです」

日高「大体この上の人たち、古いし、頭硬いですよね。多様性ってなんなんでしょう」

るい「そう言ってくれる日高さんの存在、ありがたかったです」

日高「とんでもない、もし何かあったときは連絡させてください」

るい「はい。これ、よろしくお願いします」

デスクの上には廃棄ダンボールとノートPCのみ。

るい、日高に会釈して去っていく。

るい「全く、クソみたいな離脱理由だ」

るい、密かにぼやく。

○同・外

るい、ロビーから出てスマホを確認。
チャットの画面。

るいの「今から本社に向かいますが大丈夫ですか？」のメッセージで終わっており、返事がない。

るい「え、スルー？」

電話をかけるるい、その傍に救急車が到着し、邪魔にならないよう避ける。
運ばれていく患者、倉津である。

るい、電話を切る。

るい「出ないし。何なのもう……行くか」

るい、患者に目を向けず去って行く。

○イメージ・メッセージのやり取り

チャットの画面、るいが「とりあえず向かいます」と送信。

チャットやメールの行き交うイメージ。

「お世話になっております」「大変申し訳ございません」「今から伺います」などの業務的なやり取りが飛び交う中、「あのクソ部長が倒れた!」「東都医大病院より検視依頼」のメッセージが表示される。

○警視庁・捜査一課・内

ショートカットにパンツスーツ姿の海老沢律（26）。

PCで「東都医大病院より検視依頼」と職員向けチャットを見ている。

律「検視依頼……?」

隣に座っている須藤（56）が答える。

須藤「ああそれは変死体の確認。家で突然おじいちゃん死んでたとか大抵そういうの。

それは俺たちじゃなくて検視官がいくから」
律「ああ、なるほど、ご愁傷様です」

律、手を合わせ、やや辿々しい手つきでメッセージを閉じる。

○飯尾ライフ・外観（外

「I I O L I F E」のロゴ看板、店舗
兼本社ビル。

家具や生活雑貨など生活用品の大手量
販店。

○同・ロビー

電話しながら入ってくるるい。

社員が行き交い、展示モニタに自社C
Mが流れている。

るい「はい、今1階フロアにつきました」

電話の相手は永牧漠（かみ）。

永牧の声「そのままロビーで待ってて！」

永牧、エレベーターホールより電話し
ながらやってくる。

恰幅がよく、ややぎこちなく駆け寄っ
てくる。

永牧「芦屋さんですね？ 今日着任延期！」

るい「えっ、突然何ですか？」

永牧「ちょっと、ひと騒動ありまして、着任

どころでなく」

永牧、るいを応接コーナーへ連れていく。

るい「えっ、ちゃんと説明して下さい！ただでさえ私ここで何をするのか説明されていないんですよ」

永牧「芦屋さんのようなスペシャリストなら説明するまでもなくわかります、大丈夫」
るい「は？　いくら何でも雑過ぎるのではありませんか？」

永牧「その物怖じしない感じ、いい！」
るい「はい？」

永牧「ここは見ての通り、庶民の生活を支える大手販売企業です」

近くのモニタに飯尾ライフのロゴ。

○同・社内風景

オフィスフロア、大勢の従業員たちが働いている。

皆、服はカジュアル。

永牧の声「全国合わせて総従業員数は約千人。ここはその総本部。でもIT部門はほぼ外部任せ、社員じゃなく客先常駐の僕たちがシステム導入や保守対応をしてる」

5〜60人ほどのIT部門のスタッフたち、ほぼ男性。全員スーツ。

○同・ロビー

るい、手を挙げる。

るい「あの、システム開発はないんですか？」

永牧「今はない。自社開発はコスト高でやめちゃった」

るい「いや、私開発分野の人間なんですが？」

永牧「え、そうなんですか？」

るい「（呆れ）え、聞いてないんですか。じゃあ私は一体ここで何をするんです……」

永牧「僕たちは常駐メンバーの取りまとめや、プロジェクト管理を行うのが主な業務」

るい「普通プロパーの社員がするのでは？」

永牧「社員さんとも一緒にやるんだけど、社

員が5人……いや、今4人しかいなくてね」
るい「少な……」

永牧「で！ 芦屋さんはチームリーダーとしてキャリアアップを図ってください。女性はまだ珍しいから、きっと優しくしてもらえるとと思うよ」

るい「女性じゃなくても優しくした方がいい
と思いますけど」

永牧「いや、容赦ない、いいねえ」

るい「何が……！ ああもういいです。で、
着任延期ってどうして？」

永牧「あ……簡単に言えば、プロバの偉い
人が倒れちゃって、社内超パニックってる」

るい「え、それ、大丈夫なんですか」

永牧「現在確認中、もしかしたらやばいかも。
明日の出勤は改めて連絡するから・それま
で待機でお願いします！」

るい「はあ……」

永牧、手を合わせて去っていく。

るい、取り残され苦い顔。

○自宅・マンション外観（夜）

○同・リビング（夜）

ソファ―に部屋着のるい、スマホで転職サイトを見て、溜息。

るい「どこも似たり寄ったり」

スマホに着信、律とのLINE。

「ごめん超遅くなりそう、事件発生」

「お先に寝てください」 「のーん！」

と叫んでいるスタンプ。

るい「そっちも異動早々大変じゃん……」

るい、「お疲れ、頑張って、ご飯ちや

んと食べなよ」とメッセージを打ち、

「ファイト！」とスタンプ。

るい「ああもういいや」

るい、気だるそうにテレビをつける。

東都医大病院が取り上げられている。

澤村(50)がインタビューに答えている。

テロップには「プロジェクトリーダー」

の肩書き。

澤村「Ree…liveの活用により、医師の能力差もフォローしつつ…」

るい、腑に落ちない顔で見ている。

るい「この野郎、今に見てる」

るい、テレビを消す。

○同・寝室（朝）

朝日の差し込む部屋。

ダブルベッドの上で目覚めるるい、隣に律が寄り添うよう眠っている。

るい「…帰ってたんだ」

律の腕が伸び、るいの体を抱きしめる。

るい「んん〜！ 苦しい！」

るいと律、しばしじゃれ合う。

○飯尾ライフ・外観（朝）

○同・IT部門フロア（朝）

部長席に菊の花が供えられている。

悲しげに花を見ている青井映介（39）、

ブランドもののジャケット、センター分けに固めた髪型。

隣に江良成嗣（24）、スーツだが髪は茶髪で緩い髪型。

江良「人死んだら本当に花飾るんですねー」

青井「（苛立ち）お前、部長がお亡くなりになったのに……！」

江良に掴み掛かりそんな青井、後ろから現れる永牧。

永牧「（恐る恐る）青井さん、そろそろ新メニューバー来ても大丈夫ですかね……？」

青井「（苛立ち）え？ ああ、任せます！」

永牧、ビビりながらスマホを操作する。

○同・ロビー

るい、急いで来たため、前髪を少し気にしつつ早足で入ってくる。

ベンチに座っている永牧、立ち上がる。

永牧「すみません、唐突な連絡で」

るい「本当に唐突で驚きました」

るい、永牧から入館証を受け取る。

○同・IT部門フロア

るいと永牧、青井の元へ向かう。

永牧「青井さん、今日から弊社のチームに入る芦屋です」

るい「芦屋と申します」

青井「今度は女性の方なんです、よろしく
お願いします」

るい、「女性」という言葉に眉を動か
すが、冷静な表情。

るい「はい、よろしくお願いします」

るい、部長席にある菊の花を見る。

永牧、視線に気付きこっそり耳打ち。

永牧「昨日言ってた偉い人、この部署の部長
さん、昨日突然お亡くなりになって……」

るい「ああ……それはご愁傷様です……」

青井の声「永牧さん！ 会議行きますよ！」

永牧「はい！ じゃあ芦屋さんも」

るい、嫌な予感を抱く微妙な表情。

○同・会議室

六人用会議室。青井、江良、八代りく（27）、永牧、るい、他男性社員が席に着きノートPCを開く。

プロジェクターで映し出されるWEB会議画面。

30人くらいの顔が映る、9割男性。

るい「うわ……」

永牧、小声でるいに耳打ちする。

永牧「わかんないことはこっそりチャットで聞いて」

青井「お疲れ様です、色々あって今日になりましたが、今週の定例会議を始めます」

るい、ちらりと永牧を見てキーボードを打つ。画面は永牧とのチャット。

るいの声「こちらのお三方は？」

るい、ぎこちなくキーを打っている江良、ひたすら議事録を打っている八代。

永牧の声「皆プロパーで、茶髪の子は江良さん、青井さんの下についた新人くん。女性

は事務担当の八代さんと、男性は時田さん
るいの声「画面の人たちは外部の常駐メンバ
ーですか？ 殆ど出社されてないんですね」
永牧の声「そう、会議室も席も足りてないか
ら、殆どテレワークしてる。僕らも週二日
くらいテレワークになるよ」

青井「ご存知かと思いますが、先日、倉津部
長が急なご病気で亡くなりました。皆さ
んも健康には気をつけて下さい」

画面の参加者たち、悲痛な表情。

るいM「おお、見事な営業スマイルならぬ営
業お悔やみ」

青井「倉津の後任ですが、このような状況で
すのですぐ決まりそうにありません。暫く
僕が課長代理となりました」

るいM「ほほう、『部長』代理にはなれなか
ったのか」

青井「ああ、そうだ、芦屋さんの紹介を」

永牧「はい、このタイミングで恐縮ですが、
弊社より新しく配属されました芦屋です」

るい「芦屋るいと申します、よろしくお願
い
します」

るい、インカメラに向けて淡々と挨拶
し、会釈する。

るい「以前は医療関係のAI開発を担当して
いましたSAです、こちらではあまり開発
業務はないと聞いておりますが、お役に立
てるよう努めてまいります」

るい、画面を見て、眉がぴくりと動く。
そして何人か目を向け、心の声で叫ぶ。

るいM「お前、お前、そしてお前！ 今、残
念そうな顔をしたな」

会議画面にるいの愛想笑いが映る。

○同・IT部門フロア

席へ戻ってくるるい、永牧、江良。

江良「芦屋さんって何か凄い人なんですね！

SAってなんですか？ SEじゃなくて？」

るい「システムアーキテクトのことです。シ
ステムエンジニアより上流を対応します。

エンジニアが家を建てる大工さんなら、私
たちは設計をする建築士です」

江良「えっ、めっちゃ凄いやないっすか」

るいM「そんな私がここへ来て、ああも残念
な顔をされるといことは、その力を活か
せる仕事なんてなさそうだ」

るい、遠くを見る表情をして座る。

るいM「左遷だと思われてるだろうな、もし
かしてそうかなって私だって思ってますよ」

江良、座って椅子ごとるいに接近する。

江良「俺も入社したばかりなんです、色々教
えて下さい！」

青井、江良の後ろからやってくる。

青井「すみません、こいつ会社のことだけじ
ゃなく仕事ってものも全然知らないんで、
教えてやってもらえますか」

るい「私の経験でお役に立てそうなことであ
ればいいのですが、ただ私も社外の人間で
すので、社員教育となると御社で……」

永牧「（割って入る）ああ、ありがとうございます」

います、我々でよければ協力致します！」

るい、不可解な顔で永牧を見る。

永牧、愛想笑いをしながらるいを隅へ連れていく。

永牧「芦屋さん、よく覚えておいて。この会社の社員は、ポンコツだらけだから」

るい「は？」

永牧「業務を外部に頼りすぎたおかげで、肝心の社員が全く育たないし、続かない」

青井と江良を見る、るいと永牧。

永牧「育っていないので、育てられない。だから外部 S I e r（エスアイヤー）から常駐ばかりさせている」

るい「そして社員教育すら、外部任せというわけですか」

永牧「まあ、程々に、上手いことやってくれたらいいよ」

るい、溜息。

× × ×

るい、ノート P C を操作し、永牧から

レクチャを受けている。

永牧「各部署からITに関する問い合わせメールがうちにきます。その一次回答をお願いします」

るい、メーラーを立ち上げると大量のメールが届く。軽く100件超え。

るい、画面を見て愕然としている。

るい「これ全部返事するんです？」

永牧「（半笑い）簡単でいいから」

るい「AIで出来ることを何故人間がやって
いるのか……」

るい、溜息をつき、返信作業を始める。
すると江良がPCを持ってやってくる。

江良「芦屋さん、資料作成手伝ってもらえませんか？
これ全部ダメって言われて……」

大きな字とPCの絵だけの稚拙な資料。

るいM「……小学生の紙芝居か？ いや、小学生の方が……」

江良「資料作成はお手の物なんですよね！」
るい「いや……他の資料を参考にはどう

ですか、例えば弊社サイトにも色々事例資料が公開されていますから」

るい、江良のPCでAI開発について作り込まれた資料を表示する。

江良「無理です」

るい「無理じゃなくて。これくらい出来ない

とこの業界でやっていけないと思いますよ」

江良「マジっすか」

るいM「そう言えるメンタルの強さは評価してやろう」

るい「私も他の仕事がありますので……」

業務チャットの画面、永牧から「最優

先でお願いします」のメッセージ。

永牧はすぐ向かいの席に座っている。

るいM「そんなことまで任せるのか……」

るい、げんなりした表情。

× × ×

江良の拙いキータッチ。

るい、横で苦々しく見守っている。永

牧はいない。

るい「あの…文章苦手ならAI使えばいい
と思いますよ」

江良「やったら怒られてしまいました、自分
の頭で考えろ、って」

るい「（小声）随分と人間の力を過信してい
らっしゃる」

江良「え？」

るい「ああ、いえ」

江良「いえーい出来た」

るい、やっと終わったと溜息。

江良「そういえば芦屋さん知ってますか？

前の部長が死んだ理由」

るい「デリケートなお話ですので詳しくは」

江良、小声で楽しそうに話す。

江良「びっくりしますよ。なんとパソコンに
食い殺されたっていうんですよ。わけわか
らないですよね！」

るい「は…？」

るい、苦笑するが、神妙な表情になる。

○同・会議室（夕）

るい、永牧、青井、江良の四人が座っている。

永牧「芦屋さん、報告や質問はありますか？」

るい「え、ああ……着任初日からメールの量が尋常じゃなく驚きました。AI活用した自動応答システムでも構築しましょうか、そのくらいならすぐに……」

青井「余計なこととはしなくて結構です」

るい「え、これ大変じゃないんですか？」

青井「慣れて下さい。皆、慣れて使いこなしています」

るい、本当かよ？ という目で永牧を見るが、永牧は目をそらす。

るいM「（呆れ）彼らは無駄や効率という言葉を知らないようだ……」

るい「わかりました、あと……いや以上です」
るいM「所詮人の噂話、この場で聞くことじゃないな。死んだ人の話なんて」

るい、小さく溜息。

○警視庁・休憩スペース（夕）

律、自販機でコーヒーを買っている。

スマホの通知に気がつき取り出す。

るいからのLINE。

スタンプの連投「解せぬ」「おのれス

テルス左遷」「キイイイイイ！」な

ど怒りの感情が並ぶ。

律「（苦笑）本日は一段と荒れておるな……」

後ろから現れる須藤。

須藤「今日は早く帰れそうだよ。どうしたニ

ヤニヤして」

律「（照れ）あっ、いや」

須藤「彼氏からか？ いいよなあ、結婚して

ない間は楽しいもんだ」

律「ああ……いや……」

須藤、俺は大変なんだと話を続ける。

律、半笑い。

律M「結婚するも何も、元より出来ませんが」

律、「私も叫びたい」と返信し、「キ

イイイイイ！」とスタンプを返す。

その後「あ、今日は普通に帰ります」と返信。

○街中へスーパー（夜）

帰宅中のるい、ぐったりしている。

るい「不毛な一日を過ごしてしまった」

るい、はたと気がついてスマホを開く。律からの返事。「キイイイイイ！」と叫ぶスタンプ。

るい「荒れているな……。お、今日は早く帰ってくるんだ……。ハツとして）よしよし」
るい、笑顔でスーパーに入っていく。

○イメージ（夜）

帰宅中の電車でスマホを見ている人々。薄暗いオフィスで残業している人々。彼らのチャットのやり取り「お疲れ様でした」「承知しました」「早く帰りたい」「部長うざい」「新人うざい」など愚痴が行き交う。その中に「あの

クソ上司死んだって！」のメッセージ。

○自宅・玄関くキッチン（夜）

律、帰ってくる。

律「ただいまく……ん？」

キッチンからドン、ドンと音が響く。

律がキッチンに行くと、部屋着のるいが2く3キロはありそうな牛ブロック肉に包丁を突き刺している。

るい「おかえり」

律「な、何してんの……？」

るい「プロジェクト強制卒業祝い、及び、不本意な思いを食に消化しようとしています。

おりゃあ！」

るい、ブロック肉に包丁を突き刺す。

律「あの！ 私、本日、刺殺のご遺体を扱っ

たばかりなんですが」

るい「刺殺、刺された……」

律「はい、背後から一突きの被害者でした」

るい、気まぜくなり包丁を抜いて置く。

るい「すみません刑事さん、私がやりました」
るい、肉に向かって手を差し出す。

× × ×

フライパンで表面を焼かれているブロ
ック肉。

部屋着の律がローストビーフを作ろう
としている。

律「作るの結局私じゃん」

るい「帰ってくるっていうから、もう肉！

りっちゃんのローストビーフ食べたい！

って思ってた。食欲の変更は不可能でした」

律「今から作っても一時間は待つのに」

るい「待つ、ぜんっぜん待つ！」

律、苦笑しながらも調理を続ける。

律「って言うか今日かなりストレス高め？

肉がデカかった」

るい「お察しの通りで。ザ・左遷配属。（ラ

ップ風に）教育不足、非効率、ポンコツ？

求められるスキルは従属、ってゆー会社」

律「うーわ」

るい「りっちゃんも何かキレてたね」

律「実は昨日にね交際届出した」

るい「ああ、警察は交際相手申告しなきゃいけないやつね」

律「うん」

るい「（嬉しそう）ついに出したんだ、っていうかオツケーだったの？ 同性でも」

律「異動で区切りも良かったし、出すだけ出した。一応拒否はされなかった」

るい「おお、よかった」

律「でもスマホ触ってただけで、先輩から

『彼氏か』って言われて、あとはよくある女の人はく結婚がく的な？」

るい「ああ……」

律「出しても結局黙られてる、『配慮』をしてくれる」

るい「出た、配慮」

指を差し合うると律。

律「るいちゃんところは、言うの？」

るい「別に隠すつもりはないけど、わざわざ

言う必要もないかな。でもまあ言いたくな
ったら言う」

律、焼き目のついた肉を取り出し、皿
に置く。

○同・ダイニング（夜）

壁時計は十時前。テーブルの上に出て
上がったローストビーフの皿とパン。
向かい合わせに座っている律と律。
るい、ローストビーフを頬張り幸せそ
うな表情、まんざらでもない律。

るい「おいし〜い、明日からも頑張れそうな
気がする」

律「そう言っていただけで何よりです」

るい「やっぱさ、このまま辞めるのは癪なん
だよ。上の奴らをギャフンと言わせたい」

律「そっか」

るい「私の意地にお付き合いいただき、あり
がとうございます」

律「いつでもどうぞ、いや、いつでもは難し

い。捜一案の定忙しい」

るい「ご都合の良い時で大丈夫です。あ、そういえば、今の職場で変な噂聞いた。配属先の部長が私の着任予定日に死んじゃって」

律「なんと。事故？」

るい「ううん、一応病死って言われてる」

律「一応」

るい「さすが刑事さん引っ掛かりますねえ」

るい、律を指差し笑うが、すぐ真面目な表情になる。

るい「パソコンに殺されたって噂が立ってる」

律「どういこと、撲殺？ それとも何かホ

ラー映画？」

律、貞子のような身振り手振りをする。

るい「古いのよく知ってんね。わかんない、物理的なのでも怪奇現象でもないと思うんだけど……。情報源の子も面白おかしく言ってるぽい。ただ配属早々縁起でもないなあって」

律「確かに……。なに、気になってる？ 開

発者としての探究心が沸々と沸いてる？」
るい「まあ、ちよつとね。テクノロジーが人を殺すなんて、想像もしたくないけど」
るい、少し神妙な顔。

○飯尾ライフ・ミーティングスペース

オープンスペースのミーティングテーブル。
ブル。

永牧とるいが向かい合って座っている。

永牧「どうですか、この職場は」

るい「スキルの無駄遣いを感じます、私である必要がありますか？」

永牧「いいよ、能力より理路整然として、メンタルの強さがここでは重要ですんで。

前の配属先でもガンガン上の人たちに噛みついていましたそうじゃないですか」

るい「それは、そうしないとプロジェクトが進まないからです。実際それでちゃんと進ませました」

永牧「うんうん、その意気込みでよろしく」

るい、呆れ顔で永牧を見る。

るい「じゃあ早速不躰なことを聞きますけど、
前の部長はなんで亡くなられたんですか？
殺されたんですか？」

永牧「（慌てる）ちよっ、ちよ！　なんてこ
と言うの、誰から聞いたの！」

るい「噂になってますよ。尾鰭が沢山ついた
情報で良ければそのまま耳を傾けますが」

永牧、咳払いして小声で話し始める。

× × ×

（フラッシュ）

倉津がPCに挟まれ、死ぬ瞬間。

永牧の声「死因は病死。多分、急な心臓発作
か何かだっ。僕たちと定例会議する直前
に意識を失って」

× × ×

永牧「耳にイヤホンつけた状態で倒れていた
らしい。その倒れた反動で、パソコンに頭
がこう挟まれて」

永牧、自分のノートPCでその様子を

再現する。

るい「それでパソコンに食い殺された……」

永牧「縁起でもない話だよ。俺も歳近いから

気をつけないとな……」

るい「ところで、誰も悲しまれていませんね」

永牧「え？」

るい「高い立場の方だったようですが、その割に困っている様子も、悼んでいる様子もない」

永牧「そんなことないよ、ちゃんとお花も供えて……」

るい「水は濁ってたし、もう萎れてました。

過去の議事録を見ていると、ハラスメントな傾向があった方なんでしょうね」

永牧「そ、そういう直接的な表現は避けた方がいいよ…… まあ……気難しい人ではあったね……」

るい、やっぱりかと呆れ顔。

○（回想）同・会議室

足を組み、横柄な態度で座っている倉津。永牧他2名の男性。

永牧の声「実務は殆ど外部任せ、じゃあその外部の仕事を把握しているかといえはできている、できていない、できている気になっているだけ」

倉津、書類をデスクに叩きつける。

倉津「永牧、どうしてチェックしていない！」

何だこの資料は。やり直し！」

永牧「承知しました来週の会議で改めて……」

倉津「資料を直すだけだろ、明日までに送れ」
困惑している永牧たち。

○元の同・ミーティングスペース

溜息をつく永牧。

永牧「彼らの仕事は支配。それが崇高な仕事だ
だって本気で思ってた人だよ」

るい「まあ、説明し直すだけに来週のものも
遅いですけどね」

永牧「違うんだよ、正しく説明するのが重要
じゃなくて、その人に耳障りよく説明する

為の準備が大変なんだよ」

るい、深い溜息をつく。

永牧「まあ、下請けにはよくある話でしょ」

るい「まあ……。じゃあ、おられなくなっ

清々しているというわけですか」

永牧「いいや、そうでもなかった」

腕時計を見て立つ永牧、続けるい。

○同・会議室

江良がプレゼンしている。

見ている、青井、永牧、るい。

青井、江良のプレゼンを中断する。

青井「何この資料、レイアウトの統一性が無
さすぎる」

るい、どこが？ という顔。

実際、至ってそのない資料である。

青井「文字の大きさが基準通りになっていな
いし、色も当社のカラーに則してない」

江良、困った顔でるいを見る。

るい「（仕方なく）わかりましたそれは直し

ます、それよりもまずは中身がどうか」

青井「こんな見た目じゃ、中身なんて頭に入
ってきませんよ。芦屋さんのスキルに合わ
せればいいというものではありません」

るい「（カチンと）はあ？」

永牧「……！」

るい「今確認するのはこのシステム導入によ
る効果が如何程かであって見栄えどうこう
は後でどうにかすれば……」

永牧「ああああわかりました！ 僕も入って
調整しますね！」

るい、永牧を睨むが、永牧はそれ以上
喋るなど激しく首を横に振っている。

○同・廊下

永牧とるい、二人並んで歩いている。

るい「（怒りを堪えながら）理路整然と説明
しようとしたのに、何で止めるんです」

永牧「豪速球じゃなくてスローボールにしよ
う。向こうクライアントなんだから」

るい「はあ……善処します。結構大変だった
んですよ、彼の資料修正。文字修正ごとき
で本題に目を通してもらえないとは……」
永牧「毎度のことだよ、適当にあしらった方
がいい」

永牧、肩を叩こうとするが、躊躇って
止まる。

るい「いいですよ肩叩くくらい、そのくらい
でセクハラ言いません」

改めて肩を叩こうとして避けられる。

るい「だからってやり直ししなくていいです」

永牧、行き場のない手を泳がせる。

その横を柳原（か）が通り過ぎていく。

両耳にイヤホン、手にはスマホ。

柳原「（不機嫌）そのクソみたいな話まだ続
ける？ 時間の無駄。俺の時間をなんだと
思ってる？」

柳原、暫く歩くと突然苦しんで倒れる。
周囲がざわめき、るいと永牧も駆けつ
ける。

「柳原さん！」 「担架持ってきて」

「救急車！」などの叫び声。

るいと永牧、人だから覗き込む。

スマホを手にしたまま倒れている柳原。

永牧「おいおい今度はスマホに殺され……」

るい、人差し指を立て、「しっ」と永牧を制す。

るい、柳原の手にあるスマホをそっと覗くとWEB会議の画面、画面の向こうにパニック状態の人々。

○自宅・ダイニング（夜）

るい、帰ってくる。

テーブルの上に大きな段ボール箱。伝票の送り主は「海老沢敏子」。中身はじゃがいもや人参など大量の野菜。

るい「ただいま、何これ」

律「ママから。買いすぎたふるさと納税のお

裾分け」

るい「おお、ありがとうございますお義母様」

るい、棚の上に写真立てに一礼する。
律の家族とるいの写真、るいと律が寄り添っている写真。るいの家族写真はない。

るい「理解あるご両親、やっばいいよね……」
律「理解っていうか、母子家庭だし、男で痛い目にあつたから女の方がマシって思ってるだけっていうか」

るい「まあ、仲良きことはいいいことですよ」

律「家庭はそれぞれ、しょうがない」

るい「うちは理詰めし過ぎて、関係までぶっ壊しちゃったからなあ」

律「それでも、自分を曲げないるいちゃんはカッコいいと思うよ」

るい「……うん」

悲しそうに笑みを浮かべるるい。

コートを脱ぎながらダイニングを出る。

× × ×

テーブルに並ぶカレー。

るいと律、合掌し、食べ始める。

るい「そういえば、昨日話したパソコン殺人事件……疑惑。思った以上に素っ頓狂な展開だった」

律「どういうこと？」

るい「パソコンに挟まれて死んだって。そんなことある？」

律「聞いたことない。そんな超重いパソコン使ってたの？」

るい「まさか、片手で持てる。だから皆が誇張した噂話。WEB会議始まった途端、たまたまお亡くなりになっただけ」

律「まるでWEB会議の向こうから殺した、みたいなの？ 今のご時世そのくらい出来そうじゃない？」

るい「いくら何でもそこまでは……。AIでも兵器動かすくらいなら出来るだろうけど、ダイレクトに人を殺すのは流石に」

律「そりゃそっか、そうなんだ……」

るい「ただ、今日も会社で倒れた人がいて」

律「えっ、今日も……」

るい「今日も。その人はスマホ握りしめてた」

るい、自分のスマホを握って見せる。

律「何それ、今度はスマホ殺人事件？」

るい「まだお亡くなりになったわけでは」

律「それって会社のブラックぶりにやられて

しまったのでは？ るいちゃん大丈夫？」

るい「大丈夫だよ、多分。もしものときはす

ぐ辞める」

るい、律を見てにやりと笑う。

るい「ねえ、ちよつと、調べてみない？ 海

老沢刑事」

律「事件性がないものは調べられません。つ

ていうか不謹慎じゃありませんか芦屋さん」

るい「だってネタにでもさせてもらえないと、

あの退屈な職場にいる意味を感じられない」

律「その分野はるいちゃんが調べた方が早い

よ、きつと」

るい「私？ いや、無理……ってこともない」

律「ほら、サイバー課スカウト候補」

るい「もしものときは履歴書送るね」

るいと律、談笑し夕食を続ける。

○飯尾ライフ・IT部門フロア

るい、永牧の隣に座って話している。

るい「検討案件の中にセキュリティツールの導入があったんですけど、あれやってみてもいいですか？」

永牧「いいんじゃない？ 状況把握にちょう

どいいし」

るい「では付与して欲しい権限がありました」

るい、ノートPCを見せながら説明。

○同・ミーティングスペース

休憩テーブルに座り、一人PCの画面を見ている。

表示されているのはセキュリティログの羅列。

るい「さてと何を探していこう」

るい、髪をゴムで一つに縛り、コードを打ち始める。

○イメージ・電子世界

青白い世界に光の線が何本も行き交う。
髪を下ろしたるい、上を見る。

様々な人々のメールや商品管理、サイ
ト作成などIT関連の業務光景が浮か
び上がる。

るい「まあ、普通の操作ログばかりか」
歩いていくるい。

PCに挟まれている倉津の姿がぼんや
り浮かび上がる。

ログテキストの羅列が大量に浮かんで
いく。

るい「操作がここで止まってる、本当に会議
直前に亡くなったんだ」

るい、腕を上下に動かしてログを流し、
WEB会議のログに目をつける。

るい「会議の会話までは残ってないか……。

そもそもオンライン上から殺すなんて無理
か。昨日倒れた人も……特におかしな点は
ない……ん？ 何これ」

るい、流れるログを止める。

「a c t i v e c u r S E」の文字
が見えたタイミングで江良の声が響く。

江良の声「芦屋さん！」

○飯尾ライフ・ミーティングスペース

るい、ハツとしてPCを閉じながら背
後を見ると江良がいる。

るい「はい、何でしょうか？」

江良「今日の晩お暇ですか？ 芦屋さんの歓
迎会を行わせて下さい」

るい「いや、そんなお気遣いは……」

江良「（前のめり）お気遣いじゃなく、普通
に飲みに行きたいんです。実は僕の歓迎会
も保留になっていたので、ご一緒に」

るいのスマホに業務チャットの通知。

永牧から「江良さんから歓迎会のお誘いがあ
るので、お取引の為にも参加して下さい！」
るい、溜息。

○居酒屋・店内（夜）

青井、江良、永牧、男性数名。女性は
るいだけ。

るい「（小声）参加者は以上……ですか？」

永牧「（小声）八代さんとか他の女性にも声
かけたんだけどね、普通の女性はやっぱり
来たがらなくて」

るいM「じゃあ私は何だ、普通じゃないのか」

青井「では改めまして、江良くん、芦屋さん、
これからよろしくお願いします。乾杯！」

るい、控えめに乾杯する。

× × ×

るい、ちまちまと料理を食べている。

青井「お前、だから彼女できないんだって」

江良「はあ……：：：そうなんですかね」

青井「芦屋さんのご結婚しました？ さぞ

かしデキる男性にモテ……：：：って、あっ」

青井、わざとらしく手で口を塞ぐ。

青井「嫌だったら答えなくていいです。つい

昔のノリで聞いちゃう、すみませんね」

るい、生ビールを飲む、全く酔っていない。
ない。

るい「してませんし出来ません、法が対応していないので」

永牧・青井「ん????」

しばし沈黙が流れる。

江良「えっ、それってどういうことですか？
相手が人間じゃないってことっすか？」

笑いながら言う江良の額を青井が叩く。
るい、気にせずビールを飲んでいる。

青井、こっそり永牧に聞く。

青井「（小声）知らなかったの……」

るい「（聞こえている）自分の恋愛対象が異性か同性かなんてわざわざ言わないですよ
ね、必要なのは扶養情報ですし」

永牧「（気まずい）いや……まあ……」

江良「ああ！ いるんすね、ほんとに！」
るい「そのくらいのノリの方が助かります」

青井、永牧、江良の軽さに引いている。
るい、平然とビールを飲んでる。

○自宅・リビング（夜）

帰ってくるるい。表情が疲れている。

律、出迎える。

律「おかえり〜」

るい「カミングアウト完了のお知らせをいただきます」

律「えっ」

るい「後ろ指を差される前に差してしまいました」

律「いいんじゃない？ 正当防衛」

るい、律にサムズアップする。

○飯尾ライフ・IT部門フロア（朝）

るい、出社する。

青井が既に出社している。

青井「お、おはようございます」

青井、戸惑いつつチラチラるいを見る。

るい、至って普通にPCを出す。

るいM「昨日は途中で邪魔が入ったから、今日こそ」

調査ログを表示しようとしたところで、
青井がるいに近づいてくる。

今度は何だという顔のるい。

青井「芦屋さん、俺たち何か変なこと言った
ら遠慮なく注意してね。ちなみに芦屋さん
のことは……誰まで言っていていいんだろう？」
るい「不必要に広めるのはご勘弁下さい」
青井「じゃ、じゃあ、不必要じゃない範囲で
ちよつと紹介したい人がいるんだけど」
るい、怪訝な表情で青井を見る。

○同・販売管理部フロア（朝）

青井に連れられてくるるい。トランス
ジェンダー女性、星田アド（34）の席
で立ち止まる。

アド、ロングスカートにロングヘア、
メイクも周囲の女性と大差ない。

青井「販管部の星田さん」

アド、立って戸惑いつつ頭を下げる。

青井「良かったら相談とか乗ってあげて」

立ち去る青井、目を見合わせるるいとアド。

アド「すみません、余計なことに巻き込まれましたよね……」

るい「ああ……いえ、こちらこそ」

アド、壁に掲示されているSDGsのポスターを見る。

アド「会社がジェンダーフリーを謳いたいで、性的少数者な人に協力してほしいみたいです」

るい「はあ……そうですか。ちなみに星田さんの他にもいらっしゃるんですかね？」

アド「いえ、公言してるのは多分私だけです」

るい「千人以上の従業員がいて二人かあ」

アド「進んで搾取されたい人はいませんよ」

るい「……確かに」

目を見合わせるるいとアド。

るい「余計なお世話されていましたが、実際お世話は必要ですか？」

アド「特にはないですが、折角ですし連絡先で

も交換しておきます？」

るい「そうですね」

るいとアド、連絡先を交換し合っていると、釣川（50）がやってくる。

釣川「あのさあ、皆段取り下手くそ！」

釣川、耳につく喋りで捲し立てている。周囲の社員たち、嫌悪感を表情に出す。数名はキーボードで何かを打っている。釣川、後ろについてきていた女性社員に言う。

釣川「君、パソコンもろくに使えないなら他の仕事して？」

女性社員、涙目でその場を去っていく。

釣川「（舌打ち）女は泣けば済むと思って：

：ん？ 君誰？」

るい「：：IT管理部の芦屋と申します」

釣川「ITの人！ あのさ素人でもパソコン使えるようにできない？ ここ使えない女の子ばっかでさ、ああ、アドちゃんは：：：るい「要領の程はわかりかねますが、少なく

とも性別は関係ないと思います」

アド、るいに少し驚きの眼差し。

釣川「ああそう？ 君は出来る人っぽいから
わかんないんだろうね」

大して響いていない釣川を睨むアド。

るい、扱いに慣れており、無表情。

釣川、席に座り、PCを広げる。同時に電話が鳴り、出る。

画面に一瞬ノイズが走る。

るい「……ん？」

るい、目を向けるが再発はなく、首を傾げる。

○同・ミーティングスペース

るい、テレワークの永牧とWEB会議。

永牧「この間倒れた柳原さんもお亡くなりにな

ったんだってね。次はスマホ殺人事件か」

るい「やめてください、本当に縁起でもない」

永牧「このご時世何が起こるかわかんないよ。

少なくとも携帯が爆弾になることは実証さ

れちゃってる」

るい「確かに。でも爆発はしていません」

永牧「気難しい人だったから、皆好きなように噂しちゃうんだよ」

るい「また気難しい人ですか。ところで起動アプリをチェックしていたら、よくわからないものがあつたんです。シューアール エスイー？」

永牧「ああ、c u r e S E（キュアエスイー）のことかな、2、3年前に導入検討していたA Iだよ」

るい「検討」

永牧「テスト導入までして、結局見送られちゃって。その残骸が残ってるんだと思う」

るい「消してないんですか？」

永牧「消すのも大変でしょ。来期にリプレイスあるから、わざわざ作業時間やコスト割くより放っておこうってなった」

るい「管理としてはどうかと思いますが、あるあるですね」

永牧「割といいシステムだったんだけどな、
問い合わせ対応や資料作成をAIに任せる
っていう」

るいM「何だ、私と同じようなことを考えた
人がいたんじゃない」

永牧「作成した結果がどうにも意にそぐわな
かったんだよね、彼らの。導入担当者も途
中で挫けて頓挫しちゃった」

るい「じゃあその担当者は……？」

永牧「辞めちゃったよ」

画面にチャットの通知、アドからのメ
ッセージ「良かったら飲みに行きませ
んか？」。

○居酒屋・店内（夜）

歓迎会よりややおしゃれな居酒屋。

るいとアド、乾杯する。

アド「急なので無理かと思いました」

るい「明日テレワークになったので。お誘い
いただきありがとうございます」

アド「いえ、折角のご縁なので、こちらこそ」
るいのスマホに通知、律からのメッセ
ージ。「会社の人と飲んで帰る」に了解のスタンプ。

アド「もしかしてパートナーさんですか」
るい「（嬉しそうに）ええ、まあ」

アド「いいなあ、私も次の人が欲しい」
るい「会社にはいい人はいない？」

アド「いるように見えます？ 全然だめ。ジ
エンダーに理解ある人は少ないし、上司は
セクハラ発言多いし女癖も悪いし、部下の
男も同調しちゃってるし」

るい「ダメダメだ」

アド「新しい女の子は取り敢えず声をかけて
る。でも私にはそういう声をかけずに、そ
の新しい子の橋渡しにしようとするの」
るい「はあ……」

アド「中間にいる人だから、どっちの気持ち
もわかるでしょって、わかるわけないし！
あいつも呪い殺されればいい。だって……」

るい、にこやかに話を聞き続ける。

○自宅・リビング（夜）

るい、部屋着で水を飲んでいる。

律、ソファーに座って聞いている。

るい「いや、相当鬱憤たまってそうだったね」

律「吐き出せてる内はいいんじゃないかな。」

吐き出せずにパンクしちゃう人は危うい」

るい「まあね。私に来るまで誰にも話せなかったただろうなあ」

律「程々に聞いてあげたら？ 大概は人に話

せずにネットにぶちまけてる。嘘かほんと

か殺人破壊予告もなくなんない」

るい「大体は口だけなんでしょ」

律「大体はね。でも可能性はゼロではない。

だから私たちの仕事は無くならない」

るい「そうなんだよね……。そういえばこの

間倒れた人、亡くなられたって」

律「本当に？ いや、スマホが殺したとは思ってないけど」

るい「でもまた呪いだって噂がたってる。二人ともWEB会議で倒れてるし、どっちも気難し〜い人だったらしい」

律「るいちゃん、もしや本当に調べてる？」

るい「ちよつとね。でもデータ多過ぎてどこに目星あるかわかんない状態だけど」

律「気になる奴がいても、下手にぶっこむのはやめなよ？」

るい「……ゼロじゃない可能性？」

律、頷く。

律「捜査するのは私たちの仕事」

るい「うん。でも放置した些細な疑問が後々大問題になる、IT業界ではよくあること。

調べて何もなかったらなかったでいいの」

律「……わかった。でも本当にやばいときは相談して。もし呪いっていうか事件性があるなら、るいちゃんだって狙われる可能性が」

るい「うん……、大丈夫、ありがとう」

るい、ソファアー越しに律をハグする。

○同・ダイニング（朝）

ラフな格好のるい、テーブルに業務ノートPCを置き、仕事をしている。

画面にWEB会議の画面。青井、江良、永牧、他数名。

一同「おはようございます」

青井「早速ですが芦屋さん、江良くんの資料やり直しです」

るいM「またか」

チャットに江良から「すみません」とメッセージ。

青井「だから、統一感がなさ過ぎです。過去資料を読み込んで整えて下さい」

るい「（淡々と）承知しました」

るいにはモバイルモニタが繋がっており、モニタにはログを調査している画面。

× × ×

江良とのチャット画面、「後でミーティングしましょう」とるいが送る。

るい「こんなことよりログを調べたいのに。
Re・lieveでもあれば……。あっ」

るい、私用スマホでメッセージを作成。
るいの声「可能でしたらRe・lieveで
調べて欲しいことがあります。パソコンや
スマホが人の生命に悪影響を及ぼした事例
ってありますか？」

メッセージを送信する、相手は日高。

○警視庁・鑑識室

テーブルの上に袋入りの証拠品が並ん
でいる。その中の一つにノートPC。

律、須藤はじめ数人が囲んでいる。

須藤「動機は『刺さなきゃいけない』と思っ
たから』の一点張りだ、全く意味がわからん」
律「日々のストレスが爆発したんでしょか」
須藤「単純にそうかもしれん、でも被疑者と
被害者には接点がない。ストレスの元を
何で狙わないんだ」

律「じゃあ無差別殺人……？」

須藤「本当にそうかはもう少し裏を取ろう」

鑑識官「パソコン調べ直してみます」

鑑識官、PCを持っていく。

律、ハツとして鑑識官の後を追う。

律「あの、つかぬことを聞いていいですか。

この事件とは別なんですか」

鑑識官、律を見て聞く耳を持つ。

律「パソコンで人を殺すのは可能ですか？」

鑑識官「……撲殺？」

律「いえ物理的にじゃなくて、WEB会議している相手を殺すとか」

鑑識官「聞いたことないなあ、アライバイ工作にされることはあるけど。自殺しろって洗脳するとか？ ん？ 洗脳？」

何かを思いついた様子の鑑識官、慌てて去っていく。

律「別のひらめきを与えた？ お、おお……」

律、戸惑いつつ、小さくガッツポーズ。

○自宅・ダイニング

るいの私用スマホに日高からのメッセージ。
ージ。

日高の声「問い合わせの件、特に情報ありませんでした。ペースメーカーのような人体ではなく機器への影響というのなら……」

るい「だよねえ……」

るいのPC画面、ログの調査。

curSEの起動ログもある。

江良とのチャット画面も表示。

るいの「ミーティング前に質問があればご連絡下さい」のメッセージに江良の連投。

「女同士の恋愛ってどんな感じなんですか、どうやって出会うんですか？」

「青井さん、デリカシーないところありますよね、俺でも引きます」

るい「お前も大して変わんねえよ」

続くチャット。「っていうか怒る仕事しかしてないですよね」「青井さんも呪い殺されちゃいそうですよ」

るい「呪い……馬鹿馬鹿し過ぎるな……」

江良とのWEB会議が立ち上がる。

江良「（軽い）お疲れ様です」

るい「お疲れ様です。江良さん、仕事に関する質問がないんですが」

江良「違うんです、過去資料を添付しようとしてたんですけど、容量が大きくなって時間かかっちゃいました。もうちよっと！」

チャットに「次年度導入予定システム」と記載された資料が届く。

江良「これを元に作ってたんですけど、もう何がダメなのかわかんないですよ〜」

るい、資料を表示。色々なシステム説明がある中、「cureSE」の紹介が見つかる。

るい、目を見開き、資料のDLボタンをクリックする。

○同・リビング（夜）

るい、業務PCでログを眺めていると

玄関が開く音。

律「ただいま」

るい「おかえり、またなんか遅いね」

律「うん、参考人が増えて事情聴取ウイークになりそう」

るい「大変だ：：お疲れ様。事情聴取もリモートでできたらいいのにね」

律「逃げられたら追いかけられないよ」

るい「それなあ」

律「ねえ、リモート先の人を催眠術やマインドコントロールで操るって出来ると思う？」

るい「うーん、出来るんじゃない？ 実物かそうじゃないかだけで、結局人間同士の会話だもの」

律「そっか」

るい、服を着替えに行く律を眺める。

○飯尾ライフ・ミーティングスペース

るいと永牧、向かい合って座っている。

るい「つかぬことですが、c u r e S Eの担

当者ってどんな人でしたか？」

永牧「開発力のある優秀な人だったよ。でも

部長とどうしても反りが合わなくって。コ

スト削減の煽りも喰らって不憫だったなあ」

るい「ああ……ちなみにその人は今何を……」

るいのスマホに通話の通知、青井から
である。

るい、スピーカーにして応答する。

るい「はい、芦屋です」

青井「芦屋さん、販管部でトラブル。今すぐ

行って！」

るい「（小声）またか……」

永牧「また？」

るい「その社員の方と懇意にしていたら、

上長から使い勝手が良い奴だと目をつけら
れてしまいました」

永牧、哀れみの苦笑いを向ける。

○同・販売管理部フロア

釣川が立って待っている。

るい、やってくる。

釣川「遅いよ芦屋ちゃん」

近くのアド、無言で謝っている。

るい「本来は私の担当ではないもので……」

釣川「水臭いこと言わないでさ、アドちゃん
ばっかり構ってないで、こっちの方が重要」

アド、不服そうにキーボードを打つ。

他のメンバーも（特に女性）、無言で
キーボードを打っている。

釣川「ネット繋がらないの、もうすぐ会議だ
から急いで」

るい「スイッチ切れていませんか？」

釣川「は？」

るい、PCのワイヤレススイッチをオ
ンにし、ブラウザをリロード、飯尾ラ
イフのHPが表示される。

釣川「いやいや何回も起きてるから。本当に
繋がってるか会議まで確認して」

釣川、イヤホンの片方をるいに突きつ
ける。

るい、呆れ顔でイヤホンをつける。
チラリとアドのPC画面が見える。
チャットに「つまらないミスしても絶対非は認めない、うざ」と誰かとやりとり。他の社員たちもチャットに悪口を打ち込んでいる。

るい、やれやれと溜息。

釣川、PCをるいに押し付ける。

釣川「ほら、ちゃんと一緒に確認して」

るい、PCを操作しようとする、二人のイヤホンから強烈に不快な異音が聞こえてくる。

WEB会議にはまだ繋がっていない。

るいと釣川、頭を抑える。

アド「どうしたの？」

るい、ハツとして自分のイヤホンを投げ捨て、釣川のも慌てて取り外す。

釣川がフラフラしている。

釣川「やっぱり壊れてんじゃねえか！」

るい「ですよ、すみません、預かります！」

るい、釣川のPCを強引に奪い去る。

○同・ミーティングスペース

るい、右手で釣川PCを操作しながら左手に私用スマホ、電話をしている。

○東都医大病院・オフィスフロア

るいの電話の相手、日高である。

(以下カットバック)

日高「音……ですか？　どうでしょう、ちょ

っと調べてみないことには」

るい「どうにか調べてもらえませんか？」

日高「芦屋さんの頼みは断れないですね……」

るい「ありがとうございます！」

日高「次の職場で何かあったんですか？」

るい「ええ、まあ……色々変な職場で……。

すみませんがよろしく願います」

(カットバック終わり)

○飯尾ライフ・ミーティングスペース

るい、釣川PCを操作し、ログを確認している。

るい「何か攻撃を受けてる様子はない……」

一つずつログの羅列を追っていき、またc u r S Eのログを見つける。

るい、自分のPCでc u r e S Eの資料を開く。

るい「……ん？」

るい、画面の文字を指で辿る。

c u r e S Eの「e」の部分で止まる。るい、釣川PCのログを見る。

起動プログラム名c u r S Eの「r」で指が止まる。

るい「キュアエスイーじゃない？ カーエス

イー？ カース？」

るい、検索エンジンを開き「c u r S E」を検索。

英単語「c u r s e」の意味「呪い」が表示される。

るい「（驚き）呪い……呪い」

るい、息を飲む。そしてファイルサーバーのフォルダを開き、c u r e S Eのファイルを検索。
一番上にある「c u r e S E 草案資料」を開く。

るい「……？」

るい、目を見開き立ち上がる。

○警察車両・車内

運転席に律、助手席に須藤。

須藤「いくぞ」

律「はい」

律たち、車を降りる。

○東都医大病院・前

病院の看板が見える。

中に入っていく律、須藤。

○飯尾ライフ・廊下

るい、私用スマホで電話するが、相手

は出ずコール音が鳴り続けている。

るい、アドレス帳から「東都医大病院」を表示。電話する。

受付の声「はい、東都医大病院事務局でございます」

るい「あの、芦屋と申しますが、システム管理部の日高さんをお願いします」

受付「日高でございますか、あの……」

受付、暫く誰かと話している声。

受付「申し訳ございません、お休みを頂戴しておりますして、ご用件は……？」

るい「……いえ、また改めます」

るい、電話を切るとメールの通知に気付く。日高からである。

日高の声「先日の件、Reelieveで調べてみました。結果を添付しておきます」

るい、日高の資料を開く。

「一般電子機器が発する電磁波による殺傷は難しい」「神経に作用する音の出力」「対象者のバイオデータをリア

ルタイムで確認」「影響するポイントを解析し集中的な出力により急性ストレス反応を引き起こす」「過剰なストレスにより生命に影響を与えることは理論上ゼロではないが要検証」などの文章が目につく。

るい、凝視したのち、歩き出す。

○自宅・リビング（夜）

帰宅する律。

律「ただいま遅くなってごめ……えっ」

テレビにPCの画面が表示されている。ログやプログラムコマンドなど。

リビングテーブルにもモバイルモニタ数台、同じようにログの表示。

るい、キーボードを打ち続けている。

律「何これ」

るい「また一人死にかけた、私も巻き込まれるようになった」

律「は……大丈夫なの」

るい「幸い大丈夫」

律「だから変に首突っ込んだらダメだって！」

るい「変な動きをしているプログラムがあったの。飯尾みたいな会社なら独自システムを入れるのは不思議じゃないけど、でももう運用していないのに動き続けてて……」

律「待って待って全く意味がわかんない」

るい「例えばりっちゃんスマホに人を殺すアプリが入ってるかもしれない、ってこと」

律、自分のスマホを見て緊迫の表情。

るい「何かのタイミングでAIが人を殺す音を発生させている……かもしれない。まだ

推測の話」

律「何それ映画の話？ AIの暴走？」

るい「いいや、AIは勝手には暴走しない。

必ず人が関与してる筈」

るい、神妙な顔で律を見る。

るい「この開発者、私が前にプロジェクトで関わった人かもしれない」

律「えっ」

るい「彼、前に今の会社にいたらしいの」
るい、「c u r e S E」の資料を表示
する。

表紙には、作成者名に「日高礼一」の
名前。

律「（驚き）日高礼一？」

律、近くのモニタを掴む。

るいと律、顔を見合わせる。

○留置所・内（夜）

壁に凭れている日高、ぼんやり天井を
見上げている。

○（回想）東都医大病院・会議室

るい（34）、立ってプロジェクターの
資料を説明している様子。

会議メンバーに女性はるい一人。

るいの声「2年前、私は医療AI導入プロジ
ェクトのリーダーを務めてた。治療や手術
方法の提案、カルテの作成といった、医師

や看護師の手助けになるシステムで」

画面には心臓の3D画像や、手術患者のカルテなど。

るいの声「彼はそのプロジェクトに参加する病院職員だった」

律の声「開発者じゃなくて？」

るいの声「うん、事務方の人間だった」

日高（杏）、白衣の男性たちと並んで座っている。

日高は白衣を着用せずスーツ。

るいの声「女だからって不毛な扱いを受けていた私を、彼は何度となく助けてくれた」

不服そうな表情をしている医者たち。

日高「プロジェクトに懸念を感じる理由が、リーダーが女性だからとはあまりに差別的ではないでしょうか？ 資料自体に不足があるのならちゃんと議論しましょう」

口籠る参加者たち。

るいの声「ニュートラルな考えを持った理解ある職員だと思ってた」

るい、信頼と感謝の目線で日高を見る。
× × ×

るい、一人着席している。

向かいに澤村（あ）と白衣の男性数名。

るいの声「実はその病院でアウティング受けたことがあって」

澤村がタブレットをるいに向ける。

インスタの画面。自宅の写真立てと同じ、るいと律と寄り添っている写真。

律の顔はスタンプで隠されている。

LGBTQ+関連のハッシュタグ有。

男性医師A「時代ですからリーダーが女性で

あるのは仕方がないとしても……」

るいの声「風紀を乱す人物がリーダーでは困る、って」

律の声「はあ……」

るい、じっと澤村たちを見て言う。

るい「パートナーが女性というだけで、まさか全ての女性に好意を抱くだけでも？ 皆さんそうではありませんよね。問題とすべき

なのは性別に関わらず性欲のコントロールが出来ない人たちで……」

澤村「芦屋、口を慎め！」

るい、澤村を睨む。

○元の自宅・リビング（夜）

モニタにReeliveを紹介するWEBサイトが表示。

澤村（ゴ）のインタビューがある。

るい「そのむかつく上司はこいつね。リーダーを外されそうになったけど、日高さんは私が外れたら困ると必死に説得してくれて」

律「それでこの間まで着任していたと」

るい「そう、せめて導入完了まではって。無事完了させた私の理性と能力、褒めて欲しいもんだわ」

律「ある意味めちやくちややってるけどね」

律、モニタやテレビ画面を見る。

るい、何が？ という顔。

律「まあ、それでこそるいちゃんなんだけど。」

それでも今の会社続ける？」

るい「仕事では一切問題を起こしてない、それどころかトラブルを何度解決したことか。だからこんな理由で辞める前例作ってたまるかって」

律「うん……」

るい「……で、彼一体何したの？」

律「捜査中の情報だから詳しくは話せないけど、ある殺人事件について裏で手を引いていたかもしれない」

るい「殺人事件……」

律「被疑者をリモートで操って……」

るい「なに……それ」

るい、呆然とした表情。

○警視庁・取調室

日高（42）と向かいに座る律。

律の背後に須藤が立っている。

律「あなたはリモート通話を利用し、被疑者にマインドコントロールを行なった。そし

て代わりに殺人行為を行わせた」

日高「僕は彼の相談に乗っただけです」

律「相談……とは？」

日高「どうすれば差別や人権侵害のない世界になるのか」

律「殺された人との関係は何だったんですか」

日高「計算上、不必要な人と判断されたのでしよう」

律、険しい表情で背後の須藤を見る。

須藤、頷く。

律「ITの分野について、今から専門の人と一緒に話を聞きます」

律、ノートPCを出して、画面を日高に向ける。

WEB会議でると繋がっている。

日高「芦屋さん……こんなところでどうして。昨日のメール見てくれましたか？」

微笑む日高、厳しい表情のるい。

るい「ええ」

日高「Re…liveはあなたが開発した

だけあってとても優秀です。敵いませんでした、僕の入る余地はなかった」

るい「……まさか、Re..lieveも改竄しようとしたの……」

画面のるい、愕然としている。

○同・会議室

広い会議室。るいと女性警察官一人が付き添いで座っている。

るい、PC画面を睨むように見ている。

(以下カットバック)

日高「改竄だなんて人聞きが悪い。より正しい存在にしようと思っただけです」

るい「どうということ？」

日高「ところで『Re..lieveも』とはどういう意味でしょう？」

るい「今、飯尾ライフにいる」

日高、おや？ と表情を変える。

るい「cureSEっていうシステムがあった。開発したのはあなた？」

日高「ああ、やっぱりまだ残ってたんですね」
るい「削除にリソースを避けないからって放
置されてる」

日高、くくくと笑いだす。

律、須藤、日高を見ている。

るい「あのシステムは何をしているの？」

日高「あれはね、正しいことを正しいと言え
るようにする為のシステムだった。聡いあ
なたならわかるでしょう。あの会社の人た
ちがいかに古くて低能な人たちばかりか」
るい「時代錯誤は感じるけど」

日高「cureSEはAIの力を最大限に活
用したシステムです。オープンソースにし
て広めたいくらいでした。でもね、凄過ぎ
ると凡人にはその凄さ自体が見えなくなる」
日高、冷ややかに笑う。

日高「くだらないですよ。見出しの色を青く
出来ないならダメだと却下されました。そ
れこそがくだらない要望だとAIだってわ
かっているのにね」

るい、わからないでもないが日高に同調はしたくなく、目を背ける。

日高「彼らは狭窄した世界しか知らない、本当に正しい評価を受けたことがないんです。だから平気で人を傷つける。なのでc u r e S Eが本当の意味で公平な評価を出来るようにしました」

るい「あなたがいなくなった後も、ずっと学習と評価を続けている……」

日高「さぞかし膨大なデータと計算結果が蓄積されたことでしょう」

るい「そうして評価した人間を制裁するシステムにしたの？」

日高「それは想定外でしたね」

どこか嬉しそうな表情の日高、警戒心が滲み出ているるい。

るい「ロボットは人間に危害を加えてはならない、人間の命令に従わなくてはならない、自身を守らなければならない」

日高「ロボット三原則ですか」

るい「覆してはならない鉄壁のルール。ロボットは決して覆さない、いつも人間が覆している。テクノロジーは人を殺す為にあるんじゃない……！」

日高「勿論その通りです。だからReeliveは開発された。あの愚かな連中と真っ向から戦うあなたは素敵でした。本当なら開発者として共にいたかったです」

るい「そうしなかったのはどうして？」

日高「出来る人間とわかると、余計な仕事ばかり任されてしまう。動きづらくって」

るい「そうしてReeliveも、curse SEみたいに呪いに変えようとしたの？
一体、あのAIは何をしているの？」

日高「学習しているだけですよ、人間のことを。呪いだなんて失礼だなあ……」

日高、律と須藤を見る。

日高「あなた方の言う件も、人間を学習し、どうすればより良く出来るか導き出したに過ぎない」

律「被疑者が勝手にAIを使って殺す相手を見つげ方法を計算したと……？」

日高「勝手にと言うのは些か失礼ですが、結果としてそうだったのでしょう」

律「その結果に反省はないのですか？ 殺された方へ何か思いませんか……？」

日高、しばし考えるが、至って平常な表情で。

日高「特に、ありませんね」

るい「あなたは人としての一線を超えている。裁かれるべきよ」

るい、睨む表情で日高を見る。

日高の表情から感情が消えていく。

（カットバック終わり）

○同・会議室

着席しているるい。

律、やってきて女性警察官が出ていく。

律「ありがとう、協力してくれて」

るい「私も聞きたい話が聞けた、ありがとう」

律「ただ、自分が手を下したわけじゃない、そこは曲げなかったね」

るい「やはりAIだけで実行できるとは思えない、出来たとしても精度が高すぎる……」

律「るいちゃん。……私は、本当にこれ以上踏み込まない方がいいと思ってる」

るい「律？」

律「これ以上は私たちが何とかする」

るい「だとしても私は放っておけない。この技術をちゃんと扱える力を持っている者として」

るい、手元のPCを見る。

○イメージ・東都医大病院・ロビー

自動運転ロボットがゆっくり通り過ぎていく。

るいの声「AI、いやテクノロジーそのものがプロメテウスの火なんだと思う」

律の声「プロメテウスの火？」

るいの声「神話の話。神が人類に火を与えた

ことにより、文明は劇的に発展した。でも同時に、争いや苦しみも生み出されている」

ロビーの待合スペースに座る様々な人。

るいの声「でも私は、ここまで辿り着けた人間を愚かなものにしたくない」

インカムをつけタブレットを手に歩く看護師。自動精算機でスマホ決済をしている人。電動ロボット車椅子で移動している人。傍に白杖を置き、目を瞑る全盲の人がスマホを扱っている。

○警視庁・会議室

るい、律を見る。

るい「じゃないと、未来の希望がなくなっちゃわない？」

律「……うん」

るい「大丈夫、何かあったらすぐ連絡する、その為のこれでしょ」

るい、スマホを掲げる。待受画面はるいと律の写真。

律「絶対だよ」

るい「うん」

律、るいの手を取る。

○飯尾ライフ・IT部門フロア（朝）

るい、永牧の席に行く。

るい「永牧さん、あの、お話があるんですが」

永牧「ごめん、今日一日中会議でさ、一旦メ

ールくれる？」

るい「出来れば直接話したいのですが」

永牧「え、まさか、辞めちゃう？」

るい「そういうわけではないです」

永牧「だったらごめん！ 後で！」

永牧、PCを持ってフロアを出ていく。

○同・廊下→化粧室（朝）

るい、歩いている。

るいM「痕跡の残る形では伝えたくないな：

：取り敢えず調査するしかないか」

横からアドがやってくる。

アド「おはよう。この間ごめんね、本当に面倒臭いのあいつ」

るい「ううん。あれから課長さんは？」

アド「特に変わりなし。適度にセクハラモラハラ発言を交えつつイキがってる」

るい「元気にしてるんだ」

アド「本当にうざい。あいつこそパソコンやスマホでお仕置きされたらいい。皆そう思ってるよ」

るい、返答に困り苦笑い。

○同・廊下（朝）

るいとアド、二人並んでトイレに向かっている。

向かいから女性社員A、Bがくる。

アドの姿を見て気まずそうな顔。

アド、素知らぬ顔で多目的トイレへ入る。るいは女子トイレへ。

○同・化粧室内（朝）

女性社員 A、B、鏡の前で化粧直し中。
るいも隣に立つ。

女性社員 A 「ジェンダーフリーなんていっても、やっぱり一緒にいられると困るわ。何されるかわかんない」

女性社員 B 「多様性尊重してますよ〜って言うだけでしょ。その前に私たちを尊重してよ」

るい、カチンときて眉を上げる。

るい 「仰られていることは半分ご尤もかと思いますが、だったら私にも警戒した方がいいですよレズビアンなので」

女性社員 A、B 「え」

るい 「だから節度のない行動をしたらどうぞ叩き出して下さい。勿論しませんけど、良識弁えていますし、選ぶ権利もありますし」
るい、にこりと笑って去っていく。

○同・ミーティングスペース（朝）

るい、自分の PC と釣川 PC を開いて

いる。

釣川 P C で表示しているログモニタをリアルタイムで監視している。

るい「男女平等とは何なのか、人類平和とは何なのか……」

るいの画面にチャットの通知。アドからである。

アドの声「さっきの感じ、わかる？ この微妙な空気」

るいの声「うん、溝の深さを感じた」

アドの声「釣川はあれよりもっと酷いもん」

るいの声「そいつはやってらんないね」

釣川 P C のログモニタ、一部ログが赤く表示される。

るい「……」

るい、慌てて画面を見る。

「c u r S E」のログである。

るいの P C にはアドからのチャット、「どうにかあいつを懲らしめる方法ないかな」。

× × ×

るい、私用スマホを使って電話。

○警視庁・非常階段

律、人目を避けて通話している。

(以下カットバック)

律「会社中のやり取りを学習している？」

るい「メールやチャット、もしかしたらオンライン会議も、社内ネットワーク上のあらゆるコミュニケーションを学習してる、そしてその中から」

るい、自分宛のチャットに「釣川最悪」と書き込む、すぐ「釣川は悪くない」と書き込む。どちらもログモニタ上で反応。

るい「特に愚痴や侮蔑、差別的なこと、誹謗中傷、ネガティブなやり取りをとにかく読み取ってる」

律「それが、日高の言ってた学習ってこと？」
るい「わかんないけど。もしこのAIが元凶

と仮定するならば、人に危害を加えているのは『行動学習』の一つなのかもしれない」

律「は……？」

るい「『制裁』や『罰』という行動学習。そして行動により人々が救われるのか、検証を行う」

律「待って、意味がわからなくなってきた。

学習の範疇なら人を殺してもいいってAIは判断してるってこと？」

るい「そうだと思いたくないけど、AIも進化している、AIらしく。人間が神の思うまま進化をしなかったように」

律「人間は……私たちはどうすればいいの」

るい「止めるしかない、私は出来ることをする。律もお願い」

（カットバック終わり）

通話が終わる。

律、立ち尽くす。

○飯尾ライフ・IT部門フロア

るい、永牧の元へ行き、隣に座る。

小声で相談を始める。

るい「永牧さん手短に伝えます。放置してる

c u r e S E のアンインストールをしまし

よう。私なら時間をかけず対応出来ます」

永牧「何突然。いや、そんな所にコスト割け

ないって、了承してもらえないよ。芦屋さ

ん結構単価高いんだから」

るい「コストの問題じゃないんです。このシ

ステムが重大な問題を引き起こしている可

能性があります」

永牧「どんな？ その報告がまず必要だよ。

また資料作らなきゃ」

るい「あの、このシステムが人をころ……」

向かいの席にいる青井が立ち上がる。

青井「（苛立ち）なあ次の会議室、部屋間違

えただろ」

江良「えっ」

青井「五人いるのに、何で四人部屋なんだよ」

江良「いや、あぁ……これは青井さんが急

遽テレワーク取り消されて……」

青井「俺のせい？」

江良「いや……」

八代「あの、私ここで参加しますけど」

青井「いやいい、俺がここに残る。一緒にいたら余計腹立つし。君たちが使って。ほら行って」

やや不貞腐れた顔の江良が立ち上がる。

永牧「はあ、僕らも行こうか。さっきの話、次の会議の時間が余ったら話してみなよ」
るい、溜息をつきながら立ち上がる。

○同・会議室

席に着くるい、永牧、江良、八代。

モニタにはWEB会議の画面、青井の他数名の参加者。

青井「（不機嫌）じゃあ次、江良」

江良、「販売分析システム導入について」という稚拙さはない、ちゃんとした資料を映す。

江良「ではよろしくお願いします。マーケティング部から導入支援を依頼されているシステムについて説明します」

るい、永牧に話しかけようとする。

青井「はい、ちよつと待って。この間言ったよねレイアウトがクソだって。全然改善されてない。ねえ芦屋さんどうなってんの？」
るい「は……？」

青井「あなたのその高い能力で指導して下さいって、お願いしたじゃないですか。それなのにこの有様ですよ」

るい「（小声）そんな小さいことに構ってる場合じゃないっての」

青井「あのね、この資料はあなただけが見るのではなく、感覚の異なる多数の人が見るわけですから。配慮が足りないんですよ」

永牧、隣で小さく落ち着けと手振り。

青井「もういい時間ないから後にして。次」

ほっと一息つく永牧。

解せない顔のるい、永牧を密かに睨む。

永牧のPC画面がチラリと見える。

誰かとのグループチャット。

永牧の声「無能なのに偉そうな所だけ引き継いじゃったよね、芦屋さんも可哀想だけど、もっと上手くやって欲しいなあ」

永牧の投稿に20以上のいいね。その後「それな」「御愁傷様」「芦屋が狙われてるならこっちは大丈夫かな」などの返事が続く。

WEB会議の参加者も何かチャットを打ち込んでいるように見える。

るい、その様子を怪訝な顔で見る。

るい「永牧さんチャット止めて……！」

永牧「（気まずい）え」

しかしリップは止まらず、機械的な声がチャットの書き込みを読み上げる。

声「あくあ、もう一生いびられるんだろっうね」

声「パワハラで訴えればいいのに出来ないんだろっうなあ、異動先ないもんね」

声「俺たちもいつまでこのポンコツたちに従

わなきやいけないんだ」

声「江良くん、辞めた方が身の為だよ」

声「青井のせいで仕事滞ってるし、この人もパソコンに呪い殺された方がいいよ」

機械的な声の笑い声。

青井「……うっ」

画面の向こう、青井に異変が起こる。

頭を掻きむしり。瞳孔が開き、うめき声をあげて苦しんでいる。

るい「青井さん！ イヤホンを外して！」

るい、慌てて会議室を出る。

○同・IT部門フロア

騒然する中、駆け込んでくるるい。

青井、デスクの上に突っ伏している。

るい「誰か救急車！ 急いで！」

るい、私用スマホで電話。相手は律。

るい「律！ また……また起きた私の目の前で、手遅れかもしれない……！」

○警視庁・捜査一課内

るいからの電話を聞いている律。

るいの声「このままでは私も……誰も彼も標的になってしまいかもしれない」

律、電話を切り、須藤の元へ行く。

律「須藤主任、お話があります」

○飯尾ライフ・IT部門フロア

騒然としているフロア。担架で運ばれていく青井。

その様子を見ている永牧、他社員たち。

永牧と江良、るいの元へやってくる。

永牧「ねえ一体どういうこと？」

るい、永牧が手に持っているPCを奪い取り、画面を見る。

永牧「あ、ちよつと！」

画面のチャット、青井の悪口ばかりである。

永牧「いや、これは、こうでもしないとやっ
てらんないじゃん。江良くん、見ちゃだめ、

見ないで！」

るい「ちよっと来て下さい」

るい、永牧の手を引く。

永牧「いや、これ俺だけじゃないし！　って

いうか君だって言いたいことがあるだ……」

るい「そんなのどうでもいい！　とにかくき

て！」

永牧、るいに圧倒され従う。

江良「あっ、ちよっと！」

江良もついていく。

○同・会議室

先程会議をしていた部屋にいる、るい、

永牧、江良。

永牧「じゃあ何、c u r e S Eが俺たちのや

りとりを見て、倉津部長やこの会社のムカ

つく人たちを殺したってこと……」

るい「簡単に言えばそうです」

江良「マジやべえ……あ、あの、じゃあもし

かして青井さんが倒れたのって」

永牧「いや、え、俺」

るい「間接的に。だからそのサーバーを止めたいんです」

永牧「サーバーを止めても皆が持つてるPCにも入ってるんでしょ、意味なくない？」

るい「だったら全社のネットワークと端末を止めるべきです」

永牧「そんな権限俺たちにあるわけないよ！」
るい、髪の毛をゴムで一つに縛り、自分のPCを開きコマンドを入力する。

永牧「ちよっと、何してんの……」

るい「権限がないのなら強行突破します」

永牧「ちよ……まさかハッキングする気……」

るい「何もしないよりはマシです。この会議室に誰も入れないで下さい！」

永牧「待ってそんなことしたら俺たちが……」

江良、ドアの鍵を閉める。

永牧「あっ」

江良「永牧さん、やばいっす。俺にだってやばいことくらいわかります。あと俺は、芦

屋さんの方が信頼出来ます」

永牧「えっ、ええ〜〜：：：知らないよ、俺は知らないよ。」

永牧、投げやりに椅子へ座る。

江良「芦屋さん、俺たちに何か出来ることありますか？」

るい「ないです！」

江良、シヨツクの顔。

るい「じゃあその扉を守って下さい！」

江良「はい！」

るい、物凄いスピードでキーボードを打つ。

サーバーへアクセスする為のコマンドが打ち込まれている画面。

○イメージ・電子世界

髪を下ろしたるい、薄暗い世界に立つ。周囲をいくつもの光が通り過ぎていく。るい、天を見上げる。

社内のメール、チャット、WEB会議

の音声テキストなど、大量のテキスト情報が浮かび上がっている。

その殆どがネガティブな内容。

るい「こんなにも……」

周囲に無数のログやコマンドの文字列。その文字列が一つに集まり、人の形になって降り立つ。

日高の姿である。

日高「こうしている今も学習は続いている」

日高の周囲に青井に対するネガティブなやり取りが表示される。

「急に倒れたんだって」「そのまま帰ってこなくていいよ」「やっとな罰が当たった」などの書き込み。

るい、ある一点に気づく。

りくのチャットやり取り。

りくの声「ねえ、音で人って死ぬのかな？」

女性社員Aの声「何いきなり物騒な話」

りくの声「昨日見たドラマで、スマホの音で人が死んじゃうって話があったの。あれっ

て現実的に可能なのかな？」

女性社員Aの声「今の技術なら可能なんじゃない？ 殺したい奴でもいんの？」

りくの声「やだやめてよ。ただもう部長や主任がうざいから、ちよっとくらい痛い目にあって欲しくって」

女性社員Aの声「わかる、いつそ遠隔操作でパンと殺っちゃいたい」

りくと女性社員Aの笑い声。

るい「まさか……」

AIが音で殺す方法を学習し、構築していく様。

無数のソースコードが周囲に蠢く。耳をつんざくような轟音が響く。

○飯尾ライフ・会議室

るい、とてつもない速さでキーボードを打ち、コマンドを叩いている。傍で見て慄いている永牧、江良。

江良「や、やべえ……」

るい「何これ、自分を守るので精一杯。システム自体を止められない、追いつけない」
永牧「こんな芦屋さんでダメって、じゃあ誰なら大丈夫なの……」

るい、瞬きもせずキーボードを打ち続けている。

○イメージ・電子世界

ソースコードの中に佇む日高。

日高「人を傷つける者は評価しない、残る者は正しき者だけであるようにしたんです。

健全な世界である為に」

るいの周囲に顔写真のある従業員データがいくつも表示される。その中にはアド、釣川、女性社員A、Bもいる。

るい「……！」

女性社員Aの声「ジェンダー平等だか何だか知らないけど、特別扱いされる意味がわからない」

女性社員Bの声「あいつ絶対調子に乗ってる」

釣川の声「何でうちの部署に回すんだよ、めんどくせえ」

社員データの中、るいのデータも表示される。

声「優秀だか知らないけど女がでしゃばんな」
声「上から目線だよな左遷されてきたくせに」
青井の声「外部はこっちの言うことに従えよ。
金出してんのはこっちなんだから」

永牧の声「面倒なの回されたな、いっそ自滅してくんないかな」

発言した者たちの従業員データと、
「TARGET」とパラメーターのよ
うな画像が表示される。
るいも表示されているが15%くらい。
青井だけ100%になっている。

るい「なんてことを……」

日高「人間なんかでは到底及ばないリソース
がここにはある」

るい、よろめくが倒れない。

○飯尾ライフ・会議室

るいの手が止まる。

江良「芦屋さん……？」

るい「……確かに、人間のリソースでは無理」

るい、別の画面を立ち上げ、コマンドを打ち始める。

その画面を見ている永牧、顔面蒼白。

永牧「芦屋さん……それ、うちの会社のサー

バーにアクセスしようとしてる？」

るい「Re…lieveを使います」

永牧「はあ……勝手に他社のシステムを使う

のは違反行為だぞ！」

るい「江良さん！」

永牧、るいを止めようとするが、江良が邪魔する。

○イメージ・電子世界

るいの頭上にRe…lieveのロゴが浮かぶ。

日高「それは……！」

周囲のコードが徐々に消滅していく。
Re・lieveから新しいコードが
作り出されていく。

るい「どうやったって、人間はもうAIの処
理速度に追いつけない。だったらAIで対
処するまで」

日高「どうして止めるんです。あなただって
沢山不本意な扱いを受けてきたじゃないで
すか。これは不毛な偽善です」

るい「偽善で結構、傲慢な善意をぶちまけら
れるよりは全然いい」

Re・lieveの作ったコードが逆
に消滅していく。

眉間に皺を寄せるるい。

るい「あなた、感謝されたいの？ 余計なも
のを排除すれば神と敬われるとでも？」

日高「あるいは。世界を乱す存在がいる限り、
人々に平穏は訪れないのだから」

るい「だったら聞いてみるといい。あなた自
身に」

日高「……？」

るい「あの人たちを殺したのがこのシステムだと知ったら、人々はどう感じ、どう行動しようとするのか」

AIの機械音声の話す。

声「質問にお答えします」

AIが描いた人間の顔が並び、答える。

声「何それありえない、気持ち悪い、怖い」

声「やっぱりAIなんて使うもんじゃない」

声「禁止する法律が必要だ」

声「作った人を今すぐ処罰しよう」

賞賛する言葉は一切なく、呆然として

いる日高。

るい「一番恐ろしいのは。AIですら瞬時に算出した倫理観を失っていたことね」

curSEのコードが消滅していく。

るい「どんな優れた技術も人を傷つけるものなら受け入れようとしなさい。戦争以外ではね。そんなこと起こさせてたまるか」

日高「でもあなたも、その力をちゃんと正し

く使い続けられますか？」

日高の姿、一瞬別の男に変わりかける。るい、その姿を確かめようとするが、シャツトダウンしたかのように周囲が暗転する。

○飯尾ライフ・会議室

るいのPCにネットワーク停止の表示。ドアを叩く音が響く。

律「警察です！ 開けて下さい！」

るい、江良を押しつけ扉を開ける。

律と須藤の姿。

律「よかった、無事だった」

るいを抱きしめる律。

るい、ほっとした表情を見せる。

○同・IT部門フロア（夕）

鑑識官がサーバー機やPCを押収している。

律の声「日高の開発したシステムは全部押収

しようってなって、令状取った」

○同・ロビー（夕）

パトランプの赤い光が差し込んでいる。
髪を下ろしたるい、険しい表情でベン
チに座っている。

律「事情聴取、いけそう？」

るい「大丈夫、行く」

律「まだ何か、気になってることがある？」

× × ×

（フラッシュ）

取り調べの日高。

日高「学習しているだけですよ、人間のこと
を。呪いだなんて失礼だなあ。人間を学習
し、どうすればより良く出来るか導き出し
たに過ぎない」

× × ×

るい「日高は本当に人を殺す為のAIを作っ
たのだろうか」

律「それはこれから警察で追求していく」

るい、頷くも釈然としない表情で歩く。

○同・IT部門フロア（夕）

誰かの手、早い手つきでスマホのAIチャットらしきものに入力している。

「以上の結果を記録し、次の対策を考えて」。

よろよると歩く永牧がやってくる。

永牧「明日うちの本社に行くことになったよ。

俺たちどうなるんだろうな……」

江良「でもスリリングで面白かったっすね！」

永牧「は……？」

江良「お先失礼します！」

江良、何食わぬ顔で帰っていく。

永牧「若者切り替え早あ……」

ドン引きしている永牧。

○東都医大病院・病室

ベッドに青井の姿、存命である。

男性医師B「当院の医療AIが良い成果を残

せました、こちらです」

病室へ律と須藤が案内される。

× × ×

青井、律たちの事情聴取を受けている。

青井「（怯え気味に）俺が周りに厳しく言っていたから、A Iに殺されかけたなんて、馬鹿馬鹿しい！」

律「厳密には情報を得たA Iにですが。実際、御社でお二人命を落とされています」

青井、顔面蒼白。

律「人間ってもっと信頼や信用関係が必要なんだと思います、機械ではないので。勿論人を殺してはダメですけど、感情を抱くのは残念ながら自由なので」

青井「……は？」

律「……と御社の様子を見ていた方が仰られていました。ああ、例のシステムは撤去が進められていますのでご安心下さい」

青井、俯き、震えながら布団を被る。

○同・廊下

律と須藤、並んで歩いている。

律「ところで、日高は本当に人を殺せるAIを作ったのでしょうか」

須藤「お前の相方さんがそう言ってるのか？でもあのお兄さんのとき、日高は勾留されていた。どうやって操作するんだ」

律「……ですよね」

律たち、去って行く。

その後ろ、見舞いの花を持つ茶髪男

（顔は見えないが江良）が通り過ぎる。

○自宅・ダイニング（夜）

テレビに飯尾ライフのニュース「AIの誤作動で社員死亡か？」のタイトル。スタジオの専門家が話す。

専門家「w i n n y事件のように単に開発者を罰するのは、今の時代において疑問です。どんな技術も使う人次第。人を助けるツールにするか、兵器にするのか」

るい、手にしている書類「懲戒解雇通知書」をテーブルに落とす。

律「抗議しなかったの？」

るい「ああいう判断をする会社なら、こっちもそれなりの評価をするまで。まあ、私の仕事はそれなりに成果を残したみたいだし」
テレビの画面、意気揚々と R e e l i
e v e について解説している澤村の姿
が映っている。

澤村「A I には A I で対処という、正当なやり方で結果を残せました。これ以上の被害者を出さずに……」

るい、鼻で笑ってテレビを消す。

律、テーブルに夕食、ローストビーフを並べる

るい「それに、生きて美味しいものを大事な人と食べられる、その方が重要」

律「……うん」

るいと律、手を合わせ食べ始める。

○イメージ・ビジネス街の光景

スマホを操作する人、街中でPCを操作している人。行き交うメッセージ。「お世話になっております」「大変申し訳ございません」「ご連絡ありがとうございます」「ご迷惑なやりました」など業務的なやり取りから次第に愚痴の応酬になる。「クソ上司」「辞めたい」「ネットに晒してやる」「日本滅びろ」など。それらを学習するAIのソースコード。

○どこかのオフィス・外観

○同・会議室

大きなモニタのある会議室、メンバーの一人、永牧である。

T「数ヶ月後」

永牧「いや、こんな所で再会するとはね。今はフリー？」

モニタにWEB会議の画面、リモート

先にいるがいる。

るい「はい、よろしくお願いします」

× × ×

若手社員がプレゼンしている。

永牧「（やや高圧的に）ところでこの資料の
レイアウト、酷くない？」

狼狽える社員、資料は至って普通。

るい「永牧さん、笑えませんよ」

ハツとする永牧、「ごめん」と言っ
て
続けさせる。

るい M 「結局、怪物を生み出しているのは人
間だ」

続く会議。

○どこかのカフェ・中

WEB会議を閉じるるい。

「結局、怪物を生み出しているのは人
間だ」と誰かにチャットを送り、ノ
ートPCを閉じる。

その背後に江良がいる。

るい、気づいていない。

江良、電子世界で最後の一瞬に現れた男の姿に似ている。軽快に打ち、不適な笑み。

るい、江良に気付かぬまま、鞆を持ち、店を出ていく。

【了】